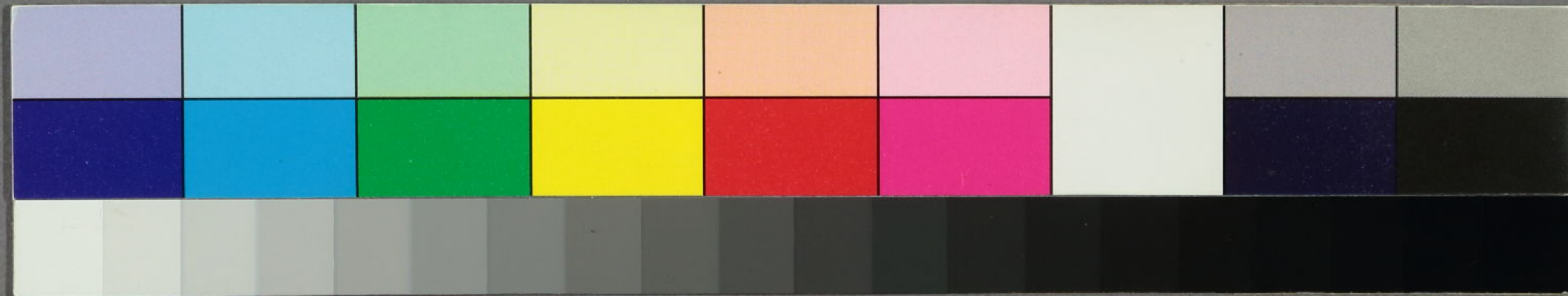


俳諧
風姿
さすの
神子





俳諧
風姿
まの神子



紙入カクノ肩カクノ背セのぬわわ
 地チの方カタともこもす矢ヤの門カド
 すまわらぬ雲クモのちうウがみミ借カ
 蒜アザ登ノボらぬ海ウミのまマ主ヌシのお
 舞マヒ多タまに九ク条ジョウ三サン一イチ引ヒキびビと山ヤマ
 東ヒト海ウミも日ヒは出イ出ヒ目メの西ニ海ウミも
 川カハ越コえエぶフぶフとトおオすス耳ミミのあ
 すスてテとトくク水ミヅふフるル金カネ守モリもモおオ祈ノリ
 鼻ハナとトくクやヤらラまマとト服ナカガタのノうウらラ刃ヤ
 結ムス紒ビシよヨきキびビハハ小コ紐ヅメのノめメんンどドりリ

○かきりく
 わらわは
 こころん
 ぬらん
 かけ
 ちり



うげ
 わらわ
 こころん
 けきん



目廊を平敷くし池のふりくま
紙をひいて心とせり居人合板
湯をぬれ茶尾の香をきつて
かしのこもれぬるがうねり
おどろしは布地と遠く人の
さびや煙草の味ありたると
骨かきも端は切らばげ解子
おどろくららさくわさかから
はねまじりの中は落る一二
くまの管とて頭は木枝を結



袴の袖はこまてかへんは猶の跡
 こまてかへんは猶の跡
 顔掩州備のこまたり
 戸もたへてあつらひ
 櫛越てかへんあつらひ
 袴の尾まじりたる
 志はたなほこころ
 わまらむにさうする
 寄る者もあはれ
 雪空の山原流わー一笠の下

○ちうすわりのり

身の

二日
せむね



お子れ



王の字と

こま
やう
段



一
 〇はりつてをれんく
 茶はた乃てふふしうをねん
 煮のまは二條乃ち二時
 ぬすむて口よりびばは花為
 小の方らつれ乃奥之山の家

一
 一とぶで
 汗袖
 みる
 みる

今日
 みる
 みる
 みる

湯に漬つるをさきとせり
 湯屋のうんまはさきに
 燈を金瓶の一回に
 十牛の湯え白田のよなる
 一字の二切種と板本
 死にけりまらぬ
 うつてくまはる
 徳より悪のわまはる



○ありていりていりて

○はらり〜

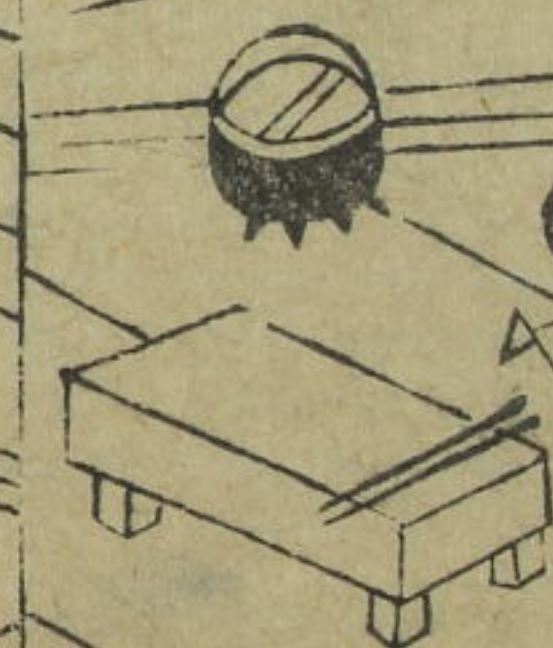
鯉カマス



料理

とろろ

手〜



定法

万灯堂のわらわら

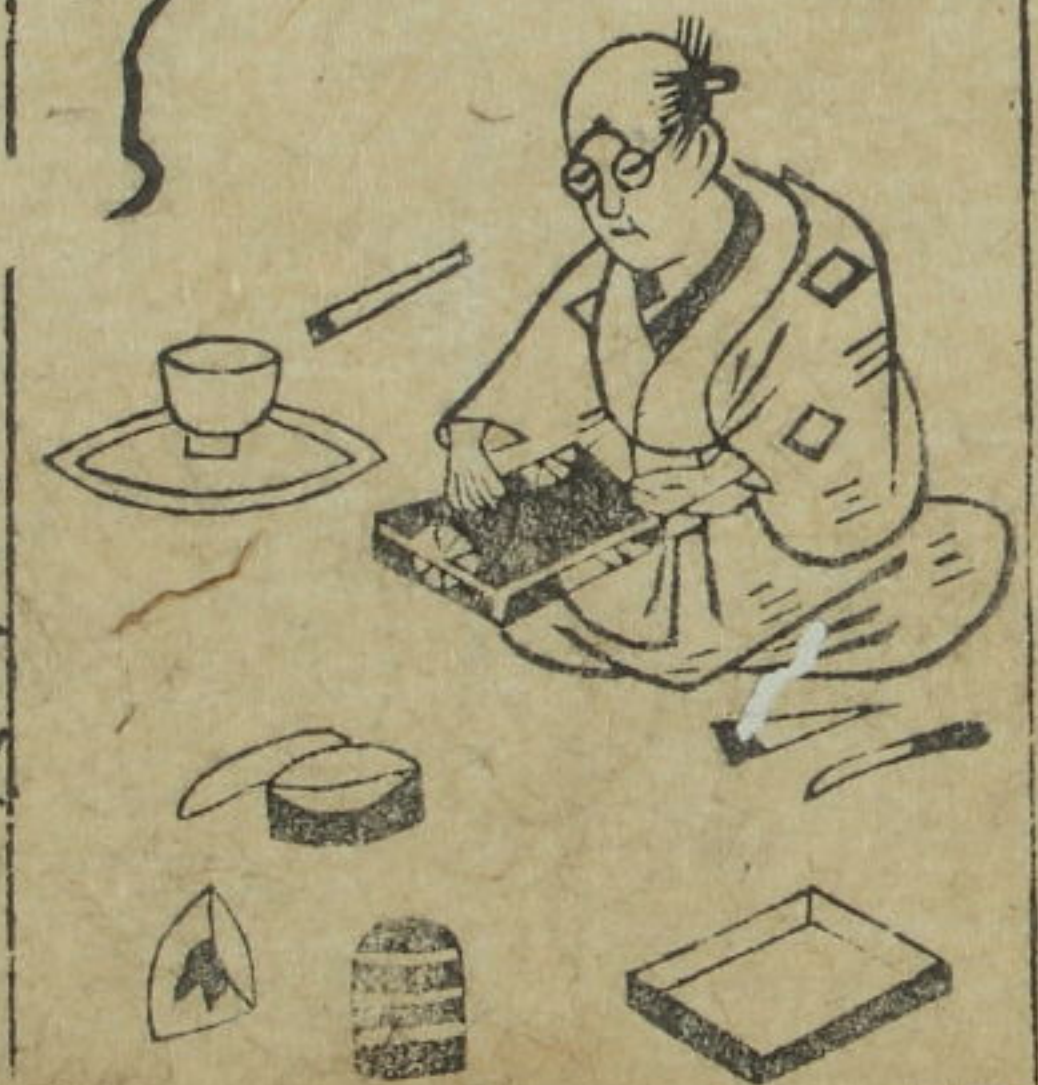
○うさぎの

麩トギの

おろし

おろし

おろし



風カサの

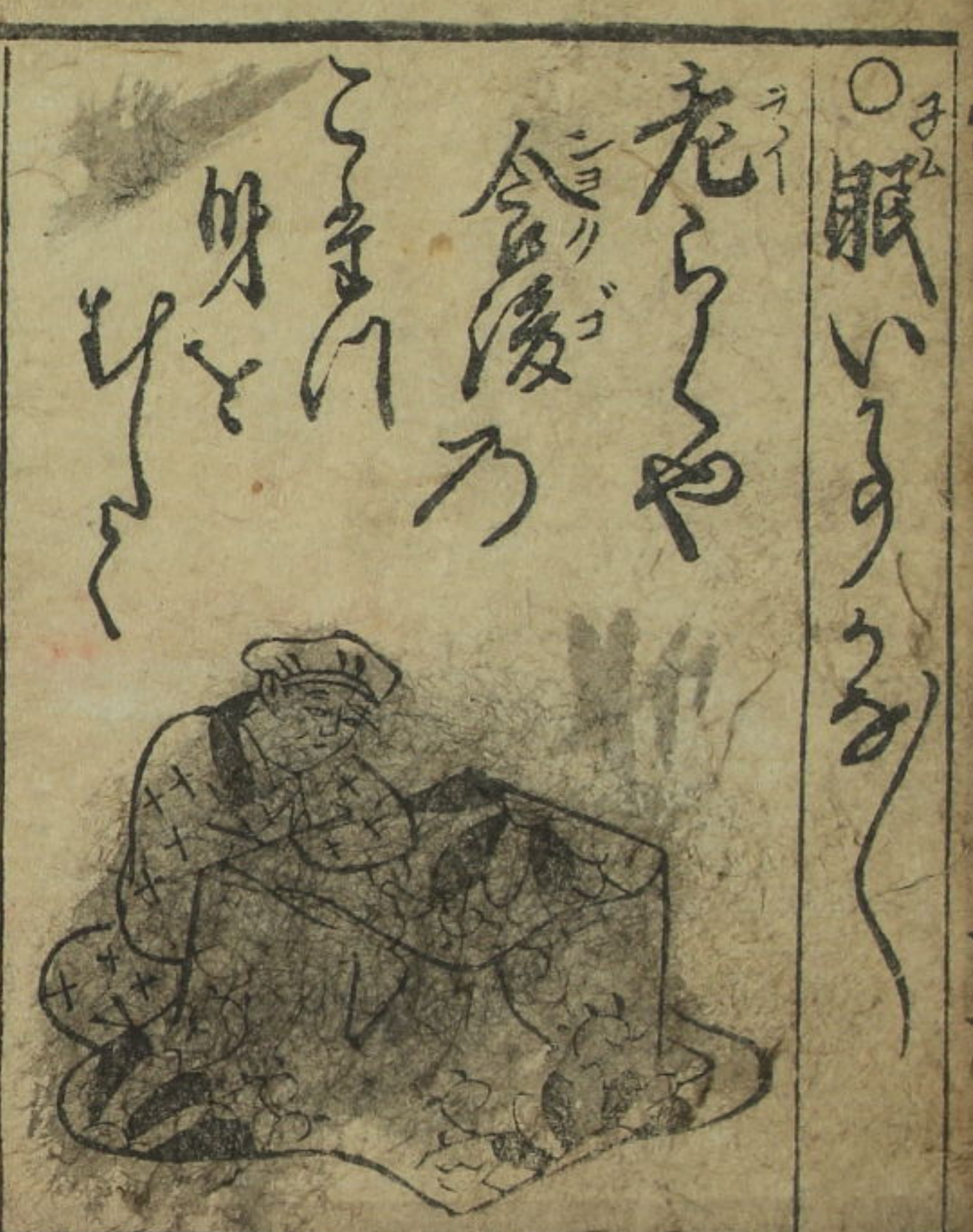
糖ワド友ノ

あ

あ



三



○ 伊合よりの

こゝろ
おつ
ひ方
帰



後
れ
氣



い
し
ま
い
り
ま
い
り
ま
い
り



新
ま
い
り
ま
い
り
ま
い
り



軽^{コイ}とよ
さあらの
まの
ま^{セウガカ}



野乃松^{ノノマツ}
天の^{アメ}
木^キ
内^{ウチ}
み

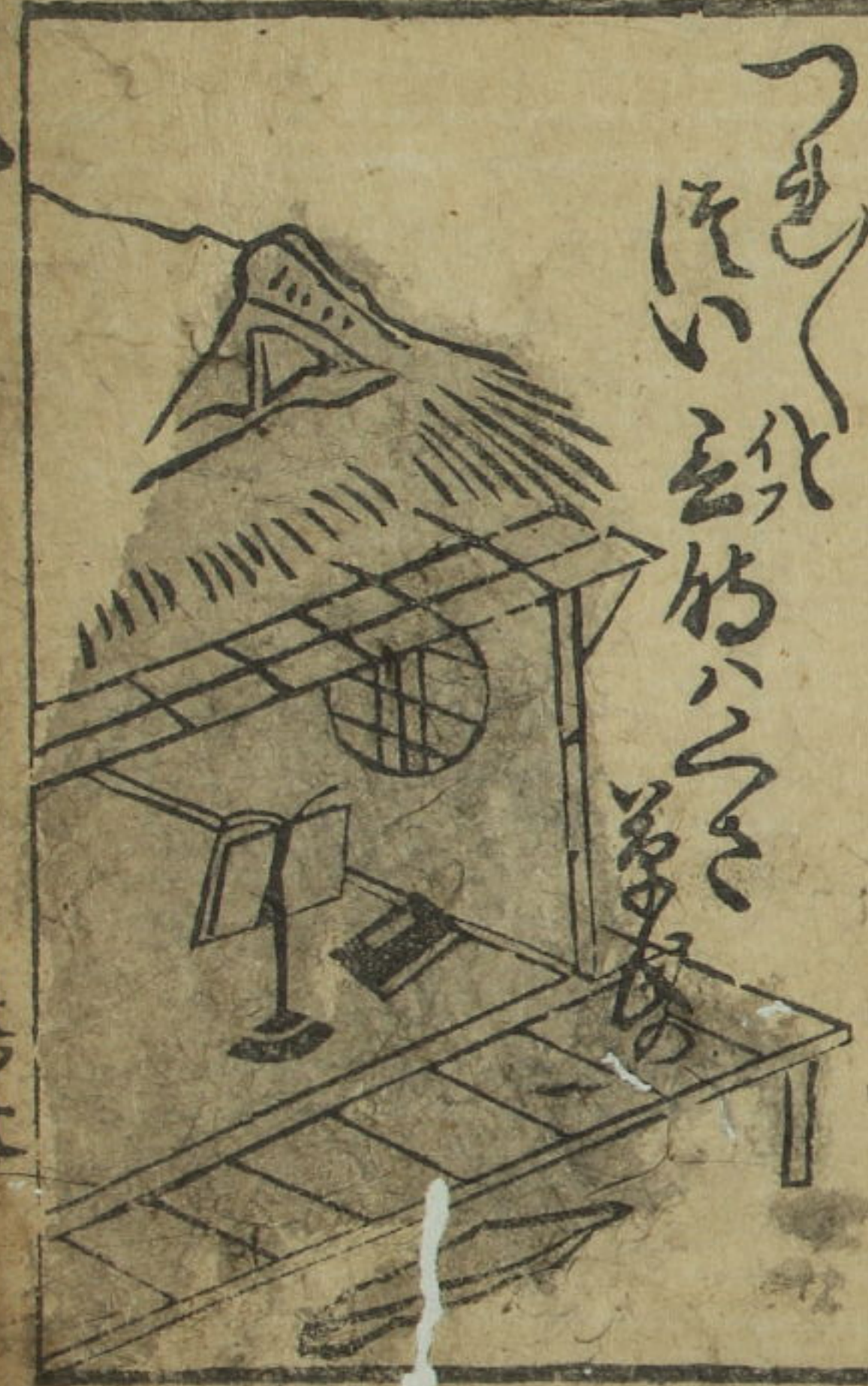


○
松乃野

ハチノ代
あまの
あまの
あまの



○
あまの



ついでに
はい 玉竹の
葉の



○だんごの
まじり
の
下
船
の
か
が
の
は
ら
ら



海
壁
火
の
う
け
さ
の
水
鏡
月



○あ
ろ
く
う
ら
り
く
い
ぬ
悪
色
れ
湯
の
貝
殻

○すたのめりり

小判の

ひびき
かき



ゆめど

けいも

かき

かき



○すたのめりり

まやめ

タダレ

かき

かき



イキカ

かき

かき

ちり





○あつひめい



○あつひめい

○いぢの葉ずり



言の紅

りん

さし

山

葉の



物ハ

肉ハ

木ハ

花ハ

かきくち

文考忌

○いぢの葉ずり

風の香子にほろの角カヤ

おまよひの候候守リ

のせんたよひの産ル坊

○いぢの葉ずり

貴女様いつの時も待たせ

持し子の流るるおちから橋

虫鳥よしのれや推のさん

愛も相と春月の嵐

○ち〜る〜い
 〆〆凡そ花の香立也ツイッモ白
 白鼻の無火のけ者九
 紅毛ワシの唇細く不二形
 花の香ハ松と種あるは人然
 落目とびとさうせば相一葉
 振キレの傾城もあゝらんちやれは
 油中花のあふ花五万教書
 箱の中の香も人へまゝに
 △まねいふ

△松くさうが家の底
 △ひきよせく
 くらとふ物と福川屋
 下戸系かる東海を
 ときりく海をど軟かり
 △やん中一
 まが子と葉をて矢橋毎
 月記系ハ梅ハ奇
 文字ぬけはははのメ
 △あ〜よ

かまふ軍位受
獲ら炮線内立
りんとる流健
朝の極所を
おさく
釣解ハ射ち
はかどか
○ば
茶田毒や
古額

○海
二の括
急
○
△
イ子
五

あつて思ふたうか

○いかにいかに

百軒の百金もたすこ

もきき増補し

あつて思ふたうか

○いかにいかに

血縁のあつて思ふたうか

傷ハ何故もあつて思ふたうか

浅草の文海もあつて思ふたうか

○いかにいかに

あつて思ふたうか
あつて思ふたうか
あつて思ふたうか

あつて思ふたうか

○いかにいかに

あつて思ふたうか

あつて思ふたうか

あつて思ふたうか

あつて思ふたうか

あつて思ふたうか

○たらしむるは
ふしぬ医者も世と縁あり
葛城で我と志づる恨
あかた代も橋と暮る供
たふしお世活あまがらる
布の海をひでりおかつ糸
たふしお世志づる恨
まぬのふと縁あり
砂越の水吉原はまら川
やうと

たのむは目もつれ竹枝のあり杭
深父たなす内之女も縁あり
る後たとは縁あり見必物
ぬさおの傍るるのうらせ
あつたも海なるん糸も
今これ下サル 麻糸の雲あり
泥舟の葛城死観へゆる
舟と糸も縁あり
○さうと
塩もてえ合遊出する

櫻の蕊とてさきのやまに
 ち柳と柳とを笑乃白柳
 名和もつと眼を名を走
 わさねを身よめい松の尾
 三橋の月八家れまき分
 元くくあを路法のと
 飲志らぬらまら目ほ家
 大竹の棟で大工の夕す
 所まらるる晒物と浪の者
 △ぎらり〜

医のくし度な葉餅
 柳子の歯がと散が人
 起信で指と流とら
 程度の麻とらと人
 △わ〜
 浦女のなら理田人
 仕出の流と并は服
 △そら〜
 初てあらじ江戸の酒
 酒屋ふせぬ下戸人

○にきりやうなり
し麻の美人こゝ通つる橋
花柳の柳ありきり文彦橋
此衣可世と交るや身ぬい
一世結ちらる親せがせうこ
ある夏のきりは例の笛太鼓
○ほちてあそびね
ゆき人ききとせせの絆糸橋
お入店からとせ港の柄八切お
賣れ銀米とと糸靴の世

枕初といふ風は誠は具
殺政の海客とあそびに
い下海のかかりたる五九
○あしおかり
小葉のふむいせあしおかり
いし海の花を柳とけり
かしらよけの糸と糸川
つる身よりとけらるるや
あかやとけりおかり
は湯れすらに有るる能や

○あつらひくわ
 星久入ホシキやふも葉アハに乃月
 海ウミのしと形カタなきの葉アハの葉アハ
 池イケのしと形カタなきの葉アハの葉アハ
 藤フジのしと形カタなきの葉アハの葉アハ
 糸イトのしと形カタなきの葉アハの葉アハ
 葉エフのしと形カタなきの葉アハの葉アハ
 △おさくし
 酒サケのしと形カタなきの葉アハの葉アハ
 跡アトのしと形カタなきの葉アハの葉アハ

○あつらひくわ
 旅ツリのしと形カタなきの葉アハの葉アハ
 分ワケのしと形カタなきの葉アハの葉アハ
 了マタのしと形カタなきの葉アハの葉アハ
 似ニのしと形カタなきの葉アハの葉アハ
 借カのしと形カタなきの葉アハの葉アハ
 ○おさくし
 義ギのしと形カタなきの葉アハの葉アハ
 義ギのしと形カタなきの葉アハの葉アハ

○きんがねなり
大いなるはらへるはらへる
おとろふ本座の自分
○つらひなり
えんえんおとろふ
今瓶のつらひ世作と焼
○いそがしなり
釣起ぬ縛や糸とつらひ
時辰辰なりこれ際なり
△うはらひなり

早はらひつらひ
鱈サバの人ははらひ
八さだうふらひ
只らひなり
○おとろふなり
後のはらひなり
眼はらひなり
○おとろふなり
おとろふなり
おとろふなり

堀入のまゝ人仕き今度凡
 ○何の著せり
 赤貝のこま筋^{カラ}を^ツ見^タぐ
 ぐらまゝ立^テ衆と^ト接^スる
 高^ク^ク^ク^ク^ク^ク^ク^ク^ク^ク^ク^ク^ク^ク^ク^ク^ク

△^フ子^ココ^ク

分^ク根^クあ^るゝお^の母^ノ
 鞠^リ入^るの^まの^あら^う
 夏^とら^るま^る花^の富^富

〇^らあ^らま^らに^らり
 相^ノ判^判
 月^ノ也^也と^らく^く深^クの^の約^ク結^ス
 〇^らあ^らま^らに^らり
 相^ノ判^判

〇^らあ^らま^らに^らり
 相^ノ判^判

衣川のふるき橋に村らどり
白雲れがさし細の夕照の
かゝる焼をありと出る雲の
。たまらぬをすれ

白猫が森にけしむ級はあ
一連のちり散粒のまふ月丸
一輪の影をふる来て藤と藤
久松の藤をよほなる老也
る春乃身まふはれた川
土よぬれ物もゆるらぬ家

○かきりく

凡そまて計目れまて合杭
羅乃致をさし波のま藤息
山吹の風よま物のり大と
藤つらぬ月影がま藤柳
医者も氣を針に信ん

△志山から

瀟沔の傍や筆成の
いよせの橋乃まはら
三井の海を備へん

菊ぬれ睡む待の眠

○めぐりしうすれ

栴檀がとく六を以てわきま
心所の意大麻糸あずぬぐ

△おろしうすれ

苔の糸ふかふは雲野

心汁が約て来んとく

男鹿も志ぐ下結の笛

理はまん丸は非は西角

法のがさきと行らる

△おろしうすれ

死んば八燕の蝶つづい

身よ志つるまよふ起後

丹水評

○かきひらうすれ

酒若くびくまや流と若ん味

二十越ス娘ハアサレおらる

敬うまぬ松葉木偶の雛の控

○まろかきうすれ

擔人子持らぬ家ちをん
ちぎらふよき代後知人又候
手小覽毎の一冊のさじき

△ちりりり

目せりー子葉のふ二級

武志を中も二合

△ヨシヨシ

ちりりりりりりりりりり

ちりりりりりりりりりり

○定りりりりりりりりりり

ヤウガク 眼又 草戸 又百友
令持と二葉なるぬ松合

○まらりりりりりりりりりり

又ル 軟乃わくび 種ハ 志ハ

咳心ノ身ハ 煙オノ 志ハ

伊合と云ん 乞侍ハ 波ノ 平

○ちりりりりりりりりりり

比敵の火を ぬ田で なる たる ね

お行は ぬか つかつ や 輝の ころ

兼門の身ハ 花園の 津江

かしらぬおのほむせいの血
 △ まさしくたり
 キン 様花の勢ハ海りのあは
 恥負うてへて南がえん
 かうりしが家 漢方 山
 ○ まさしくたり
 かしらぬ日毎に夜はあすの
 ありき屋は流はくあつて川
 月也や忘は換は五千石
 多のう房ハ車は白浪身

調水息

△ まさしくたり
 若と丸がの百煙の秋
 とまのよまはれが口
 △ おんこま
 せはらつるる カツラ 結ぶ
 なが合をたれたるあ
 △ よのあハ
 ながあ キ ぬを先
 ながあ キ ぬを先
 ながあ キ ぬを先

△あつや

あつやがくこもあつや

あつやがくこもあつや

あつやがくこもあつや

△あつや

あつやがくこもあつや

あつやがくこもあつや

あつやがくこもあつや

△あつや

あつやがくこもあつや

○あつや

あつやがくこもあつや

あつやがくこもあつや

あつやがくこもあつや

あつやがくこもあつや

あつやがくこもあつや

あつやがくこもあつや

あつやがくこもあつや

△あつや

あつやがくこもあつや

114

権忠人のち忠乃 死
つれづれとては 死に候へ

△その酒よ

ゆびで花のわけり

をたぐ居のえり

溜手きくひす

△うぐいす

借をたぐひ

家上のたぐひ

○うぐいす

風をたぐひ

鼓うたぐひ

内はたぐひ

死にたぐひ

△うぐいす

養をたぐひ

白くたぐひ

うぐいす

うぐいす

よもぎつらんかきよ水

△あきしき

つぎく樹乃じ今格

△名あつず

はくしつわがしすのれ

○^子徳しき

み^{ヤミ}あまのたけのまき旅まの

うらなじくあひるねる個

清治のいよま^カ離乃まのれあ

△まんやあし

はのまろふあまうの

△うんどう

まじれ線や車切

○あきしき

まじりてうらな木車

まじりてうらな玉の

Blank white label on the right side of the book cover.

Handwritten text in a cursive script, possibly a signature or a list of names, enclosed in a rectangular border on the book cover. The text is written on a piece of aged, brownish paper that is slightly torn and stained. The script is difficult to decipher due to its cursive nature and the condition of the paper.

Blank, aged, cream-colored page on the left side of the book cover, showing signs of wear and discoloration.

